

酒井多賀志公演会 記念事業ニュース No2、2021-12

記念事業事務局 〒192-0914 東京都八王子市片倉町 703-3 (酒井方)

Tel/Fax. 042-637-1345 (留守電の場合はご用件、連絡先を入れて下さい。後ほどご連絡さしあげます)

Mail s.takashi@orgelkunst.org HP <http://orgelkunst.org/>

[事務局住所とメールアドレスが、上記に変更になりました]

今年も夫・酒井多賀志の命日、12月13日が巡ってきました。早いもので、三回忌になります。

11月も半ばを過ぎ、夕方17時頃にはもう暗くなってくると、この時刻に倒れた酒井のことが思われてなりません。私が島唄研究でしばしば訪れる奄美では、「太陽(ていだ)ぬ落ちてまぐれ(日が沈む間際)」とか「申ん時」と言って、人が命を落とす不吉な境の時とされます。布を織りきってはいけない、とか、家の中に身をひそめて難をさけるように、というのです。インドネシアのバリ島でも同じようなことを聞きました。まさに「逢魔が時」なのですね。その日私は18時ころ、自宅の駐車場に車を止めて、見ると練習室に明かりがともっていたので、明日のクリコンにそなえて練習している、とばかり思っていたのです。

東京での最後のコンサートは11月16日、純心にて公開講座「20世紀後半に起こったバロックブームとは」でした。11月31日には宝塚にてマンドリン・ギターオーケストラと共演(年明けに依頼があった時に、いけるかな?・・・とつぶやいていたのが忘れられません)。そのリハーサルが21日にあり、宝塚へ。12月14日東京純心大学のクリスマスコンサート、20日遺作CDの披露コンサートと本番を控え、多忙な合間をぬって12月8日の日曜日には高尾山へ。月一で時間を作って登っていたのですが、これが最後となりました。

思えばこの年の夏ころから体力がおちてきて、実は2018年末頃に肝臓の宣告をうけていました。本人は平然として、絶対に手術も抗がん剤治療も受けない、と言います。演奏のために鍛え抜いた筋肉にメスが入り、衰えて弾けなくなるのが耐えられなかったのです。お弟子さんからお手紙をいただき、「先生はずっと『俺が死ぬ時はオルガンを弾きながらだ』とおっしゃっていた」とのこと。その言葉どおり、最期はオルガンシューズをはいたままでした。

彼の残した音楽遺産の整理は、ようやく端緒についたところですが、変遷の大きかった彼の軌跡を改めてふりかえり、道すじをつけつつ、保全、活用に向けて微力ながら活動を続けていきたいと思っています。今後ともご指導、ご助力をたまわりますよう心よりお願い申し上げます。(会長・酒井正子)

《オルガニスト・作曲家 酒井多賀志の歩み》試論

彼の演奏活動を振り返ってみると、大体10年サイクルで変化しているように思われます。その足跡を試みに以下のようにまとめ、**主要作品**もあげてみました。次回以降、各々の時期ごとに詳述してみたいと思っています。

(0) オルガン前史；リードオルガンからの出発、カトリック吉祥寺教会へ練習にかよい、受洗。

(1) 1970年代；芸大院在学中に万国博オルガンコンクール最高位入賞、以後演奏活動を開始。カテドラル・シリーズの充実、日本の主要な音楽家・演奏団体と共演、オルガニストとしてのキャリアを確立。

(2) 1980年代；転換期、作曲開始。シュトゥルム&ドゥランク(疾風怒濤)の時代。

「光と風と波の心象」(1982)、「流離」(1985)等、自由で瞑想的、幻想的な作風。

*シュトゥルム合唱団・合奏団の指揮とチェンバロ演奏をとおして、バロックの探求。

*尺八・箏とのアンサンブル開始(1987~)。

*1984年武蔵野市民文化会館、'89年純心・江角講堂、'91年府中芸術の森劇場のパイプオルガン設置に尽力。秋田でも活発な演奏活動をおこない、'90年秋田アトリオンがオープン。日本のオルガン音楽興

隆期の原動力となる。

(3) 1990年代；身近な（五音音階の）テーマを使った変奏曲やフーガを作曲。

「赤とんぼ」（1991）、「アメイジング・グレース」（1996）、「故郷」（1997）、「夕焼け小焼け」（1998）など。

*奄美島唄（1992～）、マンドリン（1990～）とのアンサンブル開始

*日本各地に、新設されたオルガンの披露演奏等のため招かれる。

(4) 2000年代；即興的な要素・変奏曲・フーガという、オルガンの三つの様式を組み合わせた幻想曲に取り組む。「イントロダクションとフーガ」（2001）、「さくらさくら」（2003）、「我は海の子」（2005）など、規模の大きな曲が出そろった。

(5) 2010年代；歌やマンドリン、邦楽器とのアンサンブル曲に力を入れる。デジタル・パイプオルガンを使った小金井コンサートの開始（2012～）、平山クラヴィーア音楽研修所の設立（2017）。「クリスマスの為の前奏曲とフーガ」（2014）「一陽来復」（2017）。

* * *

彼はユニークで清新な作品を発表し続け、飽くことなく演奏に打ち込みました。並行してバッハ・フランクを中心とした古典のレパートリーも大切に、プログラムを組んでいます。常に現場（ライブ）感覚に導かれて、作曲・CD制作等をすすめました。

また地方で演奏を頼まれた際には、地域で親しまれている歌や民謡を自在にアレンジし、地域の演奏団体とも共演して、身近なプログラムを用意しています。楽器の無いところには自ら軽ワゴン車を運転してデジタル楽器を運び、各地の要望にこたえました（そのために50歳近くになってから車の免許を取得したのです）。

結果として、オルガン音楽の新たな表現を開拓し、裾野を広げ、日本での土着化に寄与したことは間違いありません。コスモポリタンな感覚で音楽のジャンルを軽々と越え、日本近現代に於ける洋楽の受容と創造という、文化史的にも興味深い問題を提起してきたといえましょう。

《記念事業の活動 20年11月～21年11月》

○酒井によるオリジナル作品全77曲の「曲目解説」は、HPにて一挙公開されました。収録CD、販売譜も紹介しています。

○この1年、最も力を注いできたのは、演奏記録のリスト整備、およびライブ音源（カセットテープ、DAT）動画（VHS）の保全とデジタル化で、作業は継続中です。

尺八奏者の三塚幸彦氏のご尽力により、自主企画リサイタル音源約55本、VHS動画約40本のデジタル化が終了しました。三塚氏は、CDレーベルを主宰するレコーディング・エンジニアでもあります。クリーニングやノイズの除去などにより、古いテープ音源がよみがえり大変聴きやすくなりました。

今後はアンサンブルや依頼公演の音源にとり組むこととなります。オルガンが設置されている全国の主なホールや教会、大学等が多数含まれ、その足跡は20以上の都道府県、海外4カ国にわたります。将来的にはデジタル・アーカイブのようなものを構築できないか、と考えております。

なおシュトルム合奏団の定期演奏会は、チェロの毛利巨塵氏により、すべてデジタル化されました。

○楽譜データの保全、整理。渡邊あみん氏の協力により継続中。

オリジナル作品の楽譜は、何度も手を入れ、いくつものバージョンがあります。最終的にどれを決定版とするか、検討を重ねています。国内外から楽譜の注文があり、整備が急がれます。

また楽譜をご注文の方には、酒井の生前からの遺志を引継ぎ、自筆の運指譜もお分けしています。

その他、バッハ、フランク等の生前演奏していたオルガン曲についても、自筆で運指をふった楽譜を後世の方の参考にしていただけるよう整理しています。

、

○CDの価格改定

リサイタルNo.3, 4, 5, 6は、在庫豊富につき2,000円、それ以外のCDは一律2,500円として、お求めやすくいたしました。在庫稀少なものもごございます。詳しくはHPでご確認下さい。

通信販売の場合は、価格の10%引きです。送料、振り込み手数料はご負担下さい。

○クラヴィーア音楽研修所の整備、規約制定、楽器の保全管理

5月にあらたに規約を定め、利用料を改定いたしました（詳しくはHPをご覧ください）。研修所と楽器の保全につとめつつ、運営しています。新たに2名の方が加わり、現在6名の方々が利用されています。

○Facebook アカウント「酒井多賀志公演会」 みなさんとの交流の場としています。（担当：渡邊あみん）

○その他

- ・ CD/DVD 一式寄贈；東京芸術大学付属図書館、鹿児島純心女子短期大学付属図書館に対して。
- ・ 東京純心大学『25周年記念誌』（21.03）収録の座談会に、19年5月の近影があります。
- ・ 協賛活動；酒井作品を取り上げた演奏会・関連企画に対して、HPに掲載するなど広報に協力しています。ご関係の方は事務局までご一報ください。

《Youtube「酒井多賀志公演会 記念事業」チャンネル》 新規公開

♪酒井多賀志オルガンリサイタル秋田 No.19 @アトリオン音楽ホール（秋田県） 1996.4.20

【前半：2020.12.25 公開】 【後半 2020.12.31 公開】

♪酒井多賀志オルガンリサイタル No.2 「バッハ以降のオルガン音楽」＜第一部および第二部＞@東京カテドラル聖マリア大聖堂 1974.11.15 J.S バッハ(1685～1750)～メンデルスゾーン、ブラームス、リストまでのロマン派の作品です【2021.7.5 公開】。

♪オルガンコンサート No.24 (1986), 26 (1987) より 酒井多賀志・自作自演の世界①②③

初のオリジナル作品のみのプログラム。流離（1985）に至る初期の作品は珍しいです【2021.12.7 公開】。

<今後の公開予定>

- ・ 自主企画リサイタルのバッハ、フランク特集
- ・ 秋田でのラストコンサート（動画）
- ・ 尺八・箏とのアンサンブル
- ・ 酒井多賀志指揮・チェンバロ；シュトルム合奏団定期演奏会 など。

♪季節の酒井作品ご紹介；春、夏、秋、クリスマス、新年

《音信》 お便り・コメント有り難うございました。抜粋してご紹介します。

▽ハインリヒ・シュッツ合唱団創設、ムシカ・ポエティカ 淡野弓子さんより

（遺作 CD について）『天国の窓』より「朝の気配」、素敵な音楽で何度も拝聴いたしました。CD 全般に漲る生命力、音楽を進めて行くエネルギーに圧倒されました。

そして' 20 年 12/24 に頂戴いたしましたメールに添付されていた音楽の溢れんばかりの喜び！

これぞクリスマスです！

北原白秋の詩によるキャロル風の「雪の教会クリスマス」にも惹かれましたが、2013 年作曲の「クリスマスの為の前奏曲とフーガ」は圧巻です！ 聴き終わって暫く茫然としてしまいました。

「酒井多賀志公演会 記念事業」のサイトで膨大なご自作のリストを拝見し、さらに驚きが広がりました。

、

返す返すもご他界が悔やまれますが、こうして天国から会いに来て下さったのだと憶いを深めて居ります。

「酒井多賀志公演会 記念事業」によってより多くの方が酒井多賀志さんから生きる力が与えられますよう、記念事業のご発展をお祈り申し上げます。(2020年12月)

▽追悼のメッセージより

- ・初めてトッカータとフーガを聴いた時は、魂がふるえる程でした。先生のコンサートに行くと、素に戻るようです。もう聞けないものかと思うと、寂しいです。
- ・さっそくCDを聴かせていただき、恩寵と光に満ちた音色が舞っていました。
- ・CDは生命力に溢れていて、音が天から降ってくるようで素晴らしいです。
- ・(トッカータとフーガニ短調の出だしの) 寸分の狂いもない、狙い澄まされた、綱渡りどころか糸の上に立つような奇跡のような音に戦慄を覚えました。

▽渡邊 肇さんより

わたしは高校の時から大学の2年(1983年)まで酒井先生にオルガンを教えていただいております。

武蔵境のお宅までうかがいくロダトーンでのレッスンでしたが、毎回大変楽しみでした。そのころはレッスン室と一緒に置いてあった堀チェンバロもふくめて、先生が時々弾いて下さったりしたのも、夢のような時間でいまでも大変いい思い出になっております。

シュトルム合唱団や合奏団をお持ちになって精力的に活動をなさっていたのが印象的で、わたしの中ではいまでも新進気鋭の音楽家です。飄々とステージに出ていらしてダイナミックに時には繊細な演奏で、いつも楽しませていただいております。

酒井先生に教えていただいたのは4年間という比較的短い時間だったのですが、非常に多くの曲を経験させていただきました。フレスコバルディからフランクまで一生心に残るような曲を教えていただき、本当に感謝のことばもありません。選曲にも先生のお人柄が反映されていたようにも思います。

わたしがオルガンを教えていただいていたところに比べると、オルガンもあちこちにできて身近になってきましたし、演奏法も含めて大きく変わったように思います。

日本のオルガンの激動の時代を酒井先生がけん引して下さったのではないかと感じております。先生がそだてられてきた日本でのオルガン文化が、これからも発展していくことを願っております。(2020年5月)

▽ブログ『森の音舎』より「オルガニスト酒井多賀志さん」

(須藤オルガンCD収録の) パッサカリアは3拍子の舞曲です。8小節の主題=テーマは20回変奏され、4声のフーガへと続きます。

酒井多賀志さんのパッサカリアのテンポは♩=68

フーガに入るとギアが変わり♩=96までアップします。これはかなり速いです。

カール・リヒター、ヴァルヒャ、コープマン、アラン、などの演奏に耳馴染んでいると、このテンポで入るのは驚きです。

各声部のクリアさ(音色の選び方=音響デザインとテクニックによる)を保ちながら、パッサカリアの主題に加え二つのテーマが織り成す緊密なやりとりが展開されていき、調性が曖昧になる混沌(この曲は何処へ向かうのか、聴いていて最もスリリングな箇所)を経て、ナポリの6度半終止後コーダへと突入、締めくくられます。

全体を貫く推進力と緊迫感から息もつかせぬ演奏となっています。ふっと、仄あかるい長調でテーマが奏でられる部分などは、和らいで、よけいに美しく感じられ、風に野の花がそよいでいる映像が浮かびます。

この曲は重厚な? =遅めで重い演奏(録音)が多いなか、一陣の風が吹き抜けていくかのよう。

、

そう、フーガに疾走感があるのです。

足鍵盤(ペダル)の動きも羽根のように軽やかです。どかどかペダルを踏んでいる感じ(足の上下動が大きくなると上半身も揺れ、いかにも難曲に対峙してる感あり)が皆無で、滑るようなペダルさばきは、ピアノのレガートのよう。ペダルはベース音を踏むだけではなく、縦横にテーマも奏でます。

それにしても革のシューズ(オルガンシューズは底も革張り)を履いて、あの太いオルガンの足鍵盤上でグリッサンドのような動きが可能なのかと。いとも軽やかな動きはエレガントですし、至近で聞いた時も雑音などほぼ聞こえません。そして、身体のどこにも余分な力が入っていない演奏ですね。(中略)

フーガ終盤へミオラが現れるあたりは、多くの演奏ではゴウゴウと楽器全体が唸るように混濁?して聴こえます。それは楽器の特性を生かした表現方法かもしれないし、使用するオルガンの型、ホールや聖堂の残響もあるのでしょうか、酒井版パッサカリアにはそれは見受けられません。

どこか、突き抜けた、比類のない演奏だと感じております。

<https://ameblo.jp/nana28-klavier/entry-12651758100.html>

〈おことわり〉

「記念事業ニュース」はご縁をいただいた方にお送りしておりますが、今後お受け取りを希望されない場合はご提供を中止致しますので、事務局までご一報くださいますようお願い申し上げます。

なおご提供されました皆様の個人情報は、第三者に預託、提供は致しません。